『まんじ』104 号(2007.5)

奇蹟の生還

新井　宏

「宏と美枝子が病気さえしなかったら隣の五十坪も買っていたのに」と母から聞いていた。本当だとも思っていなかったが、昭和二十四年の晩夏、ペニシリンがそれほど高価であったことも確かであった。

まさに我が人生の分れ目であった。とにかくペニシリンによって、奇蹟としか言いようのない人生を拾った。私が小学校六年生、妹の美枝子が二年生、そしてその下の妹の玲子が四歳で、末弟の繁はまだ影もなかった。流行性脳脊髄膜炎という法定伝染病からの生還であった。

私は長い間、そのペリシリンは英国から輸入されたものと思っていた。英国のフロリーがペニシリンの発明者であることを聞いていたからである。第二次大戦中、原爆やレーダーと共に、最高級の軍事機密であったペニシリンが、いくら終戦後とは言え、日本で生産されていたなどとは、思ってもみなかった。だからこそ、戦後の超インフレ進行の最中、輸入品がどれほど高価であったか考えれば、五十坪の話も大げさとも思わなかった。

ところが、そのペニシリンは、戦後まもなく日本でも量産化されていたのである。しかも、その頃、世界中でペニシリンを作れたのは米国と英国と日本だけだったというのだから驚きである。

その秘密は、旧陸軍が進めていたペニシリンの研究にあった。その研究成果を基盤にして、終戦の翌年には早くもペニシリンが市場に現れていた。そう聞くと、私の命は陸軍の研究によって助けられたことになる。陸軍の悪口は言うまい。

もっとも、この国産化はＧＨＱの突然の発売禁止命令によって一頓挫してしまう。理由が良くわからなかったのは当時の特徴であるが、やがて中止命令はまた理由も

分らず解除される。ただし、販売先は自由ではなく、米軍向け、それも米軍兵士の梅毒治療用であった。

昭和二十四年。

「青い山脈」がヒットし、日当二百四十円のニコヨンと言う言葉が生まれ、戦後社会もそれなりに安定に向かっていた。戦前は勤め人をしていた父が、大陸から復員後、若い頃の大工に戻り、なんとか生活の目途をつけて、一家もやっと疎開先の新潟の長岡市から引揚げてきたばかりであった。品川区の戸越公園に十二坪のあばら家をつくってから半年。夏休みも終わり、残暑きびしい頃、町内の秋祭りが行われていた記憶がある。

ゆとりなどあるはずが無かった。入院先の都立駒込病院でさえ、冷蔵庫もなく貴重品のペニシリンを井戸で保冷していた時代であった。高価な輸入品のペニシリンを、よくぞ保管していてくれたと言うのが私の認識であった。

それが国産品だったとは……。しかも、戦後の日本経済復興の一翼を担って、朝鮮戦争の頃には、外貨稼ぎに大活躍していたとは……。

まさに奇蹟の連鎖であった。

幸運のスタートはまず英国のチャーチル首相が肺炎に罹ったことである。

昭和十八年の十一月末、チャーチルは、大戦後の日本領土問題やビルマ方面作戦について、米国ルーズベルト大統領や中国の蒋介石総統と話合うためカイロ会談に臨んでいた。しかし老齢七十歳のチャーチルは、体調をくずし肺炎に冒されてしまう。老人の肺炎は今でも致命傷であるが、それがペリシリンによってわずか二日で快癒してしまったというのである。

そして十二月一日には、「第一次大戦以降に日本が占拠した太平洋諸島、中国領土の回復と朝鮮の独立」という極めて重要なカイロ宣言が発表された。この時、蒋介石が「朝鮮の独立」を認めなければ、韓国は今頃、チベットのように中国領土の一部であったはずだ。

もちろん、このカイロ会談の内容は、ただちに世界中に打電され、各国の新聞ニュースのトップを飾った。それと共に、チャーチルがペニシリンによって救われたとのニュースも世界を駆け巡った。

その時、中立国アルゼンチンにいた朝日新聞の今井義一がニューヨークタイムスの記事などを参照して、これを長文の記事に仕立てあげ日本に打電中であった。

突然、空襲警報のようなサイレンが鳴り響く。アルゼンチンも大戦への参戦を決め、日独と国交断絶した知らせであった。これが今井の最後の打電となった。

しかし、実はこのニュース、世界的な誤報であった。チャーチルはペニシリンではなく、ズルホン剤によって救われていたのであるが、もう訂正電は送れない。その結果、朝日新聞の誤報が、日本におけるペニシリン開発の起爆剤となり、私の命を救った。

それはカイロ会談からちょうど一年前のことであった。

陸軍軍医少佐の稲垣克彦は独文誌「臨床週報」の記事にペニシリンに関する最新情報を偶然に見つけ出した。同盟国ドイツに向けて秘密裡に出航した多くの潜水艦の中で、唯一帰港をはたした「伊八号」が、もたらした機密技術資料の一部であった。伊八号は敵のレーダーに捉えられ集中攻撃を受け満身創痍となり沈没寸前の姿で帰港した。それ自体が奇蹟の生還であった。

稲垣はその頃、自らが率いることになった陸軍軍医学校の研究部のテーマ選定に腐心していた。後に、いずれも著名な学者となる、スタッフの梅沢浜夫、佐藤弘一、鳥居敏雄、増山元三郎などが彼のそばにいた。ちなみに、梅沢はカナマイシンの発明者、増山は我が国の推計学のパイオニアである。若き陸軍医学の頭脳たちであった。

当時の戦争では、銃弾を受けて戦死するよりも、傷口からばい菌が入り、破傷風、壊疽、敗血病、肺炎などで死ぬものが多かった。稲垣はスタッフと計らい、陸軍医学の方向をペニシリンの研究に決めた。

しかし当時の陸軍省上層部は、ペニシリン情報を敵の謀略と疑るのがむしろ大勢であった。そのため、稲垣の研究推進具申はなかなか認められなかった。

そこにもたらされたのが、チャーチルの肺炎に関する誤報記事である。急転直下、誤報の五日後には、第一回ペニシリン委員会が開催され、総動員体制が整うことになった。委員会には人体実験で有名な七三一部隊長の石井少将も参加、ペニシリン研究に強い意欲を示した。

ペニシリンは抗生物質の代表格である。青カビから作るので、生物的な薬かと思っていたが、化学式で見れば亀の甲構造が連鎖した純粋な物質である。抗生物質にはその他にストレプトマイシン、オーレオマイシン、カナマイシンなどマイシンと付く薬が多く知られていて、戦後まもなくの段階でさえ百種以上あったというから、今では千種類を越えているのではなかろうか。いずれも細菌の一番外側の膜、すなわち細胞壁をつくるのを妨害することによって、細菌が溶けて死んでしまうことを原理としている。

化学物質であるが、当時は青カビが作り出す物質を抽出する方法に頼っていた。だから、ペニシリンを効率よく作りだす青カビを見つけ出すことが最重要テーマであった。しかもカビの種類によって、数百倍、数千倍も

効率が異なった。醸造文化に秀でた日本は、明治以来、北里柴三郎、志賀潔、秦佐八郎、鈴木梅太郎、野口英雄など世界的な細菌学者を輩出していたが、その素地が研究を大きく助けた。

ただし、効率の良い青カビを見つけるだけでは、ペニシリンの量産は不可能であった。試験管内で培養するレベルでは、二十日鼠で薬効を試験することは出来ても、体重が一万倍の人間相手ではどうにもならない。大きなタンクに空気を吹き込みながらカビを大量に発生させる生産技術が重要であった。表面培養法とか深部培養法という技術であるが、この点でも日本は恵まれていた。

チャーチル誤報事件から一年にもならない昭和十九年末には国産ペニシリン「碧素一号」が森永食品の三島工場で量産化され始める。稲垣は戦後のことを考えて、これを特許に登録した。かれら陸軍医学エリートにとって日本の敗戦は既に視程内にあったということだ。

伊八号が帰港した確率、独文誌「臨床週報」が搭載されていて稲垣がそれを手にした確率、チャーチル誤報事件の確率、そしてアルゼンチンが参戦して誤報を取り消せなくなった確率、日本の伝統的な細菌学や醸造技術、いずれをとっても、戦中の日本が独自にペニシリンを開発できたのは、奇蹟としか言いようがなかった。

しかし、私が流行性脳脊髄膜炎から生還できたのは、それよりも何よりも母のお陰であった。高熱にうなされる我が子を見て、近所の町医者の診たてを全く信用しなかった。電話も自由に使えなかった時期に、とにかく救急を訴えていた。

その時、すぐ近所の中学生が高熱症状のまま死亡する事件が起きた。日本脳炎と疑われたようであるが、これが私を救う決定的な出来事となった。ただちに都立駒込病院に運ばれる。かすかにサイレンの音を覚えているが、そこで記憶が完全に途絶える。

晩年、母は衰えから極度の心配性になり、私の妻を悩ませ続けた。「おもらし」恐怖症のため「もしパンツが無くなったらどうしよう」といい続けていた。ベッドの下に山ほどパンツを準備しておいても、なかなか安心してくれなかった。

入院すれば治療費を気にしてか「もしお金がなくなったらどうしよう」とか「宏が先に死んだらどうしよう」と「もし」ばかりを繰り返していた。若い頃は、家族を取り仕切っていて、そんな心配性なところなど全く見せなかった母も、本質的には心配性なタイプだったのだと、その時にはじめて悟った。しかしその心配性が我が命を救ってくれたのだった。

都立駒込病院に救急入院して、直ちにペニシリンが脊髄に直接注射された。母は言っていた。その直後から、もう助かるとの徴候が現れたと。劇的な薬効であった。一日後に私を追いかけるように妹の美枝子が入院してきた時には、私の生還はもう確実となっていた。

ここで心配性の母はむしろ苦しみ悩む。二人とも馬鹿になっていたら、どうやって死のうかと考えていたという。三十四歳の母。それは我が娘の現在の歳であった。

生還の瞬間を良く覚えている。無性に暑かった。夢の中でジャンプをしては宙を泳いでいた。掛け具を蹴飛ばしていたらしい。大きな天井の扇風機がゆっくりまわっていた。担当の医師は女医さんで、美しい方だったと母はいっていた。細面の髪の長い方だったように思う。

退院の日、生を味わう私にとって、澄み切った青空が、とてもまぶしかった。駒込病院から田端の駅に向かう一キロ余りの坂道には、まだ野原が残っていて、黄色い花が咲きみだれていた。すすきもあったように思うが確かではない。

母はその時に何を考えていたのだろうか。病院に手鏡を忘れてきたことを悔やんでいた。何かの思い出の品であろうが、私もその鏡のことを良く覚えている。つまらぬことを良く覚えているものだ。

戦後すぐに、ペニシリンが国産化されたとは言っても、青カビの性能では、米国の水準に遠く及ばなかった。米国では広く国民が参加して青カビ探しを行った結果、偶然にも、ペニシリン研究センターのあったペオニア市の主婦が届けたメロンの青カビが抜群の性能を持つことを見つけ出していた。これに放射線や紫外線を当てて改良した青カビ株がその後の主流になる。GHQが日本のペニシリン製造を禁止したのは、性能の良い青カビ株を提供する意向を持っていたことにあった。

したがって、日本で見つけた青カビ株は戦後のペニシリンに使われることはなかったが、大量生産の技術であるタンク培養法は、ここで大きな役割をはたす。森永薬品に続いて、東洋レーヨン、万有製薬が相次ぎ深部培養を始めた。昭和二十一年には月産四億五千万ユニットであったが、二十二年には六十五億ユニット、二十三年には二百五十億ユニットの生産となり、価格も昭和二十三年には十万ユニットあたり五百円と、実質的に五十分の一まで急落した。

安くなっていたとは言え、それでも妹と二人ではおそらく一千万ユニットくらいは投与されたであろう。五万円くらいにはなったであろうか。ニコヨンの基準で計算したら年収である。やはり土地五十坪くらいに相当する勘定になる。母の言っていたことも、まんざら嘘でもなかったようだ。

母に救われたという思いは、私にとって深いところでずっと確かな存在であった。別に親孝行をしようと言う意識ではなかったが、母の老後は私が看るものだと無意識に、いや無条件に考えていた。妹である娘達のところの方が気軽かも知れないと思っていたが、結局、最晩年は妻が看てくれた。

母は亡くなる直前、音にならない感謝のことばを一生懸命に口を動かして、妻に伝えていた。息子の宏への心遣いであったかも知れない。いや、本心だったように思う。それがうれしかった。

病気との関連では、父のことを何も覚えていない。病院で会った記憶もない。しかし今はよく判る。ペニシリンの支払いのために、とにかく働くしかなかったのだ。私たちが入院している最中にも、金策に飛び回っていたに違いない。

その父は、私が生れた時に「博」と名付けるつもりだったらしい。しかし、赴任先から「宏」とするように連絡してきたのだと言う。もしも博士になったら困ると言うのが理由であった。

父の亡くなる寸前に、私は博士号をとった。時代が異なり、私にとってはどうと言うことではなかったが、父が喜んでくれた。それがうれしかった。

駒込病院から家に帰ると、親戚に預けられていた四歳の玲子も戻ってきた。幼い心にも傷つくことがあったと後で聞いた。法定伝染病のせいもあったのであろう。病気から生還したからと言って、周囲の伝染病への恐怖感は強烈なものがあったのではなかろうか。兄として、美枝子や玲子をいとおしいと感じたのは、その時が初めてであった。

馬鹿になるはずだったふたりは、どうもその頃から逆に学校の成績が向上し始めたようである。

「病気のお陰で頭が良くなったのでしょう」としばしば言われた。そんな気もした。高熱で脳中の不必要な部分がきれいに掃除されたように思うと妙に納得できる。

しかし、それよりも拾った人生という意識が、我が人生に余裕をもたらした。もうけ物の人生と思えば、母のように心配性に陥る心配もない。拾った人生、それが全て好回転に繋ながった。

奇蹟の生還。それはまさしく偶然の連鎖であった。しかし、ただひとつ偶然とは思いたくないことがある。それは母の心配性が私を救ったと言うことだ。

まもなく桜と共に逝った母の十三回忌を迎える。